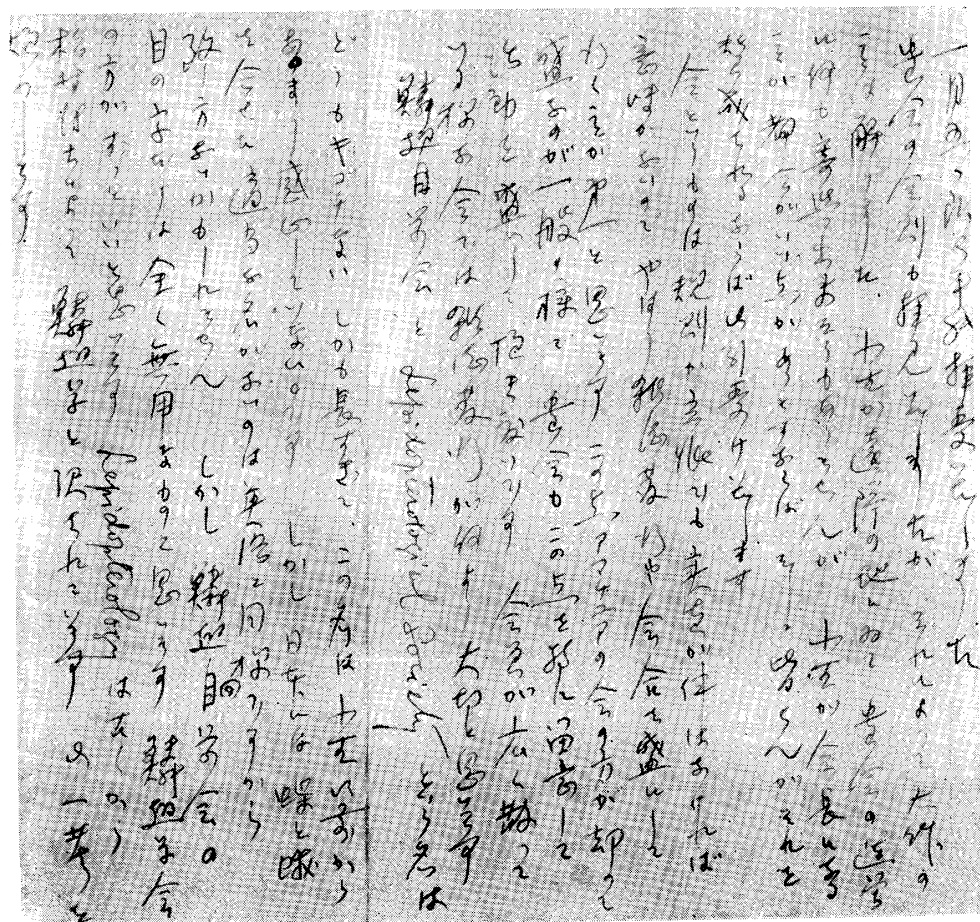
# 会長江崎悌三先生

緒方正美

江崎悌三先生が亡くなられて早くも１ケ月．もう先生にお目にかかれないと思うと非常な淋しさに胸が痛む．私が先生に初めてお目にかゝったのは1952年11月28日．従って先生に親しく接し得たのは僅かに数年に過ぎなかったが，この間私は中学の後輩として，又日本鱗翅学会幹事として，又最近は原色日本蛾類図鑑の共著者の１人として，全く分に過ぎた御厚意と親しさとで遇して頂いた．そもそも初めてお目にかゝったのは私の家，先生の方からわざわざ来て下さったので，私は全く恐縮したが，同時にひどく感激してしまった．先生との初対面がこんなのであった上，その後何度も先生にお会いしてお話を伺っていると，心の温まる思いがし，すっかり魅せられてしまい先生が大好きになった．全く心酔していたといってもよいであろう．

先生の亡き今過去をふりかえってみれば，どんな些細なこともなつかしく目前に浮んでくるが，それを一々語っても限りはない．ここには日本鱗翅学会会長として会のために努力して頂いたことを少し書きとめ先生を偲びたい．

日本鱗翅学会が先生と緊密なつながりを持つようになったのは1954年先生が会長になられてからである．もっとも先生はそれ以前から会員であられた．先生が会員となられた事情は次のようである．即ち1945年創立された日本鱗翅目学会は初めは大へんな意気込であったが，戦後の社会混乱も手伝って，僅か２年位でその活動は全く停止していた．この当時は会としての組織も弱く，殆んど創立者岡田慶夫氏の独力によって運営されていたため，このような事態に立至っては会は姿を消すより仕方がなかった．しかし折角出来た会が無くなるのは残念というので京都在住の有志がうけつ

ぎ，会の再活動をはかって現れたのが“蝶と蛾”であった．これとて初めはなかなかうまくゆかなかったので，何よりも根本的なことは経済面の建直しであるということになり，先づその一つとして会誌贈呈は一切廃止し，すべて会費を払う会員になってもらうことに決め，私が選ばれて先生に事情を申し上げお願いしたのである．今から思えば全く厚かましい失礼な申し分であったと思うが，会をよくしようとの熱意を汲んで下さったものかお叱りもなく当然のことだと御承諾下さった上，大いに会を盛んにするようにとはげまして下さった．このことは当時の幹事一同としてはどんなに力強く感じたか云いきれない位で，会再出発のもととなったともいえると思う．その後学会が更に発展するために会則を根本的に改め会長の制度ができたとき文句なしに先生を会長に選んだ．そして先生に会長をお引受け下さるようにお願いしたとき次のようなお返事を頂いた．

“……小生が遠隔の地にいて貴会の運営に何も寄与出来そうもありませんが，小生が会長になることが都合がいい点があるとするならば，そして皆さんがそれを賛成されるならば御引受けいたします．

会というものは規則が立派でも実質が伴はなければ意味がないのでやはり雑誌発行や会合を盛にして行くことが第一と思います．この点アマチュアの会の方が却って盛なのが一般の様で貴会もこの点を特に留意して活動を盛にして頂き度いです．会員が広く散っている様な会では雑誌発行が何より大切と思います．

鱗翅目学会と Lepidopterological Society という名はどうもギゴチない，しかも長すぎて，この名は小生以前からあまり感心していないのです．しかし日本には蝶と蛾を合せた適当な名がないのは英語と同様ですから致し方ないかもしれません．しかし鱗翅目学会の目の字だけは全く無用なものと思います．鱗翅学会の方がずっといいと思います．Lepidopterology は古くから松村博士によって鱗翅学と訳されています．御一考を煩わします……”

即ち先生は快く御引受け下さった上，早速に私達幹事に対し注意を与えて下さっている．先生は引受けた以上は決して名だけではなくて，実際に会を育ててやらうという暖い心をお持ちになっていられたのは以上のことからも想像できよう．日本鱗翅目学会はかくして日本鱗翅学会と改名されたのである．

又“蝶と蛾”の欧名が Butterflies and Moths からローマ字の Tyō to Ga に変更されたのも先生の御意見によったのであるが，それも先生を偲ぶ，思い出深いものと思うので，次に引用させて頂く．

“……「蝶と蛾」という名がいいか悪いかということは，私はそのまゝで差支ないと思います．アメリカの Psyche，スペインの Eos などの様に（必ずしも会報ばかりではありませんが）の如く，短かい名があって夫々副題がついています．London 昆虫学会の今の Proc. B は最初 Stylops でしたし，ドイツの Iris も別に Deutsche Ent. Zeitschrift という副題がついています．引用するときは短かい名だけを使います．Zephyrus も別に「蝶類同好会機関雑誌」という副題があります．和名が「蝶と蛾」，欧名が Trans. Lep. Soc. Jap. というのは私は感心しません．

私は以前書いたこともありますが雑誌名は固有名詞なので二ケ国または数ケ国語に訳したりするのは見識のないことです．勿論外国にもその例あり，五ケ国語で書いたものさえありますが，これは三等国，四等国のものに限られます．それで日本語ならばそのままローマ字とするのが適当と思います　その意味で Kontyû，Mushi などは見識があり，今では世界中どこでもそれで通用しています．蝶と蛾は私ならば Chō（又は Tyō）to Ga とするのがいいと思うのですが，これは賛成なさらぬ人もありましよう．皆さんでお考え下さい……”．

以上の事柄は代表的なものであるが，その他何かにつけて御指導を頂いた．幹事からの面倒な連絡，問合せに対しても，御多忙中をいつも適当な指示をして頂いたことは全く感激したものである．又会合を盛んにするようにとの初めのお言葉のように御多忙の中を暇をつくって会合に出て下さった．御病気になられてからは御健康を案じて，先生の御都合のよいようにしますからと申しても決して会合はやめようとはいわれなかった．京都に，東京に盛大な総会を開き得たのも全く先生のおかげである．

こうして先生のことを思い出せば日本鱗翅学会が今日まで発展の途をたどって来たのは，会員諸氏の協力は勿論であるが，全くそれを指導して下さった先生のおかげであることは明白である．先生こそ日本鱗翅学会の育ての親と申すべき方であると信じる．

先生を初代会長に迎えたことは全く無上の光栄であったが，先生の御厚意を無にしないように更に会の発展することを望んでやまない．そうなればきっと先生も喜んで下さるに違いないと思う．